

一人ひとりの人生の基盤としての理念 の解説

1. 背景

ここにあるビジョンは、子どものために何かをするというHOW TOを示すマニュアルではありません。さまざまな格差が原因で孤立や孤独、閉塞感を感じる社会ではなく、「いる」ことができる、すなわち人とのつながりを感じられる社会のなかで子どもが育つことをイメージして、つくりました。子どもが育っていく過程で重要視したいのは、一人ひとりが「いま、ここ」にいるということを実感することができるということです。家庭も学校も、また地域社会においても、「いま、ここ」にいたいと思える場であることが子どもにとっての居場所となります。そのように思える環境をつくっていくことが、教育においても、また子どもが関わる福祉や労働の場においても何よりも先決です。

そのうえで基底にしたのは「あなた」と「わたし」という関係を問い直すことです。この関係はあらゆる分野における人との関わりのなかで見ることができます。子どもと大人、児童生徒と先生、部下と上司、友達同士などといった「あなた」と「わたし」という「ふたり」の関係は本来、もちつもたれつの関係にあります。けれどもそれがときに一方向の関係にあります。ここにあるビジョンを通して改めてこの「ふたり」の関係を捉え直しながら、私たちの根底にある人間観や社会観、環境づくりを見直してみてください。

なお、このビジョンは名称を「なごや版キャリア支援」として、なごや子ども応援委員会と名古屋市立大学チームインクルージョンが中心となり、関係各位の意見も聞きながら検討を進めてきましたが、策定にあたっては、内容をより明確に表現するために「一人ひとりの人生の基盤としての理念」としました。

2. 一人ひとりの人生の基盤としての理念

あなたもわたしも「いま、ここ」にいたいと思える場をつくる

「権利ある主体」である一人ひとりの人間

- ・ 子どもも大人もすべての人がそれぞれの「生（いのち）」を全うする、権利ある主体者
- ・ すべての人の「生」が尊重され、生きられる社会へ

「いる」ことができるコミュニティ

- ・ 一人ひとりが「人」とのつながりを感じられるよう、継続的で応答的な関係をつくる
- ・ 一人ひとりが未来につながる体験をし、「いる」ことができるコミュニティへ

一人ひとりがいられる居場所づくり

- ・ つながりのなかで「いる」ことが実感できる居場所がある
- ・ 「あなた」が「いま、ここ」にいたいと思える環境づくりに関わる「わたし」たち

3. 問題提起

ヴィジョンをつくる前提として共有した問題は、効率性や合理性が重視されるあまりに見過される人間性、対峙する状況への断片的、かつ一方的な対応、「自分さえよければいい」、「他人のことは関係ない」という個人主義が浸透した無縁社会、の3つです。

支援や教育と名がつくところにおいて、連携や被支援者／学習者優先の考え方が広まっています。けれども、生きづらさを感じる者にとっては、それぞれの関係性が見出せず、分断されたなかで、どこに助けを求めればよいのかわからず、孤立や孤独を感じることもしばしばあります。こうした状況を改めて捉え直すために、問題視している状況を明文化しました。

どうせ自分なんて・・・

すべての子どもは、生まれながらに権利を持っています。どんなに小さくとも子どもには自分の気持ちがあります。子どもは、一人ひとりの発達段階があり、それぞれのペースで成長していきます。子どもが大人になっていく過程では、社会のなかで安心できる大人をはじめ、自分以外の人と出会い、他者との関係性を築くことが大切です。どの子どもも、一人ひとり違いがあり、他の誰ともちがう可能性をもっています。

子どもは、「たった一人の自分」を大切にされることで、安心して育ち、自分の人生の主体になることができます。そして、自分が「いま、ここ」で受け止められていることを実感することで、「自分らしさ」を発揮することができます。安心できる他者との関係性のなか、子どもは成長の過程で自分で変わっていく力を持っているのです。他者と比較することでは、安心した仲間関係を築くことが難しいばかりか、自分の「できなさ」が強調されることで自分で自分のことを大切にする気持ちが低下してしまうことがあります。比べるならば、昨日の自分と。一つひとつできるようになったと実感することができます。そして、なにより「できる自分」も「できない自分」も受け止められる環境や認めてくれる他者の存在があることで、安心して本来の自分を出すことができます。

そのやり方、続ける？

多くの専門家がそれぞれの知識およびさまざまな経験をもとに、対峙する問題にこれまで対応してきました。その反面、私たちは何度も同じような問題に直面しています。たとえば、子どもたちのいじめ、体罰やいやがらせなどのハラスメントを想像してみましょう。メディアを通して何度も、何年も私たちはこうした問題を繰り返し耳にします。その度に、関係者が事情聴取し、状況把握し、二度と起きないようにすることを約束します。けれども、実態はどうでしょうか？なぜ繰り返してしまうのでしょうか？問題への対応がその場限りの対処や「マニュアル」どおりの対応になっていないのでしょうか？目の前にいる「あなた」である子どもや対象者は、一人ひとり異なります。それぞれが個々の「生（いのち）」を生きています。対症療法的に、加害者を罰したり、被害者から距離をとったり、問題の症状に部分的な処置をしたりすれば、問題がなくなる、もしくは発生しなくなるわけではありません。問題の原因にはこうした私たちの固定的な価値観や旧態依然とした方法が関係しています。「してあげる—してもらおう」という手法以前に、今一度「あなた」と「わたし」という関係性に注目し、その多様性を大切にしていきたいと思います。

自分だけで生きてるって思う？

わたしたちが生きる社会は、インターネットの普及とSNSの発達、個人化の影響をうけて、他人との関係が不安定になりやすい仕組みになっています。また、社会の仕組みや価値観が目まぐるしく変化し、社会全体の仕組みが見えにくくなってしまいます。そのために、どのような人生設計をしても、ことあるごとにプランの見直しをせざるを得ない個人のあり方が求められています。わたしたちは、自分自身の未来を、想像・予測することが難しくなっているのです。以前は、学校の先生や親の言う通りに学歴やキャリアを積み、異性と結婚をし、地域のなかで子育てをするという現実的で具体的な人生設計をもつことで生きていました。しかし、わたしたちが生きる現代は、メディアやインターネットの普及等により、新しい情報や知識が目まぐるしく飛び交います。しかも、その情報や知識をもとに社会の仕組みが逐一変化していくのです。こうした不安定な社会を生きなければならない今だからこそ、「わたし」だけでなく、「あなた」と共に生きるということをさらに大切にしていきたいと思います。

4. 土台となる考え方

ヴィジョンを構成するのは、人間観および社会観、環境づくりです。支援や教育の名がつくところでの他者との関係性—子どもと大人、子どもと養育者、部下と上司、被支援者と支援者、同僚同士、友人同士など—を捉え直すことを目的としています。この3つのもととなっている考え方には、子どもの権利、応答的なかわり、および居場所づくりが関係しています。これらを見て、「わかってる」、「当然」と思われる人もいるでしょう。もしくは、「なぜ？」と思う人もいるかもしれません。この機会に「わかってる」こと、「当然」と思っていることをふり返ったり、「なぜ？」を考えたりしてみてください。そのためのレンズとして、次の3つを使ってみてください。

一人ひとりの声、聴いていますか？

1989年に採択された国連「子どもの権利条約」では、大きく分けて1.生きる権利、2.育つ権利、3.守られる権利、4.参加する権利を定めています。名古屋市では、子どもの権利条約の理念に基づき、2008年に「なごや子ども条例」を制定しました。「なごや子ども条例」は、子どもの権利を保障するための市や大人たちの約束です。大人たちは一人ひとりの子どもにとってもっとも良いことのために行動しなくてはなりません（国連子どもの権利条約第3条「子どもの最善の利益」）。

子どもの声は、意見という明確な形ばかりではありません。子どもの声とは、子どもが自分の気持ちを表現することです。それは、場合によっては無言や抵抗という形であらわれたり、ときに暴力という一般的には理解しがたい形であらわれることもあります。子どもが悩んだり、迷ったり、立ち止まったりしながら自分の人生を自分で選び、受け止められることで子どもの主体が形成されていきます。

子どもの権利条約では、子どもの声を聴くことは「意見表明権」（第12条）に示されています。「いま」を生きる主体の子ども「いま、ここ」を受け止め、意見表明の機会とそのプロセスを保障していくことが、子どもの権利保障の道程になります。

ここにいたいと思えますか？

わたしたち大人は、子どもが「いま、ここ」にいたいと思えるような関わりをしているでしょうか。「いま、ここ」にいたいと思えるような時間、または場とはどのように表現できますか？安心できること、信頼されていること、受け止められていること、夢中になれること、、など、一人ひとりの思いに応えられているときに、ここにいたいと思えるのではないのでしょうか。指示され続けるといった管理のもとでは、心地よさよりも監視されている感覚やみえないプレッシャーを感じるかもしれません。見守られながらもそっとしておいてほしい、困ったときに「あのね」、「助けて」、「お願い」と声をかけることができること、ただ一緒にいてほしい、、一人ひとりのこうした思いに応えられるような関わりができているのか、今一度自らに問い返してみましよう。

子どもとの対等な関係を結ぼうと大人は試みます。しかし、両者の間にある認識のちがいに意識を向ける必要があります。大人がもっている「〇〇してあげる」という考え方や行いが、ときに子どもを弱い立場に閉じ込めてしまうことさえあるのです。大人と同じように、さまざまな思いを持っている子どもであるということに気を留めておきましょう。目の前にいる一人ひとりに応答的に関わっていくことで、一人ひとりがここにいたいと思えるコミュニティをつくっていきましょう。

誰のための場なのか、考えてみませんか？

居場所をつくっていくためには、まずは誰のための場であるのかを共有してください。ときに「子どものため」と思っていた場が、子どもにとってはきわめて居心地悪い場になっていることがしばしばあります。たとえば、けがをしないように、困らないように、わかりにくいように、といった大人の気遣いが子どもから、挑戦や冒険、また発見や思考を通して遊んだり、学んだりする機会を奪うことにつながっています。大人である一人ひとりの「わたし」が思い込みでつくることがないように気をつけなければなりません。

子どもは環境を通して学び、成長のプロセスを歩みます。人とのかかわりのなかで生きている社会であるからこそ、自然とのつながりや多様な人とのつながりを感じられるように、多くの体験を重ねることも必要です。「一人じゃない」、「つながりのなかで生きている」と実感できるように、誰ひとりとして取り残されることがないように、場づくりを進めていきましょう。

5. 全市的・総合的な政策としての「一人ひとりの人生の基盤としての理念」

「一人ひとりの人生の基盤としての理念」の考え方は、名古屋市のすべての政策の土台になる可能性を秘めています。

「一人ひとりの人生の基盤としての理念」の中心となる政策群は「子ども・親総合支援」ですが、それだけではありません。

すべての政策は「名古屋市で暮らすすべての人たちが健康で安心して希望をもって生きられる」ことを目指すものです。名古屋市の諸政策は、「一人ひとりの人生の基盤としての理念」の3つの観点から、その意味と位置づけをとらえることができます。

① 「権利ある主体」である一人ひとりの人間（子ども・人間の観点から）

「子ども」も「おとな」も尊厳ある主体として生きていくための政策

② 「いる」ことができるコミュニティ（社会の観点から）

だれもがコミュニティに認められ、排除されないための政策

③ 一人ひとりがいられる居場所づくり（環境づくりの観点から）

一人ひとりが大切にされ、将来に希望をもって生きていくための政策